

ラムス Ramus, Petrusの「方法」概念に関する一考察

中 野 和 光

(第四部教育科)

(平成5年9月10日受理)

1. 研究の動機及び目的

筆者はかつて「教育は、教師と生徒、生徒と生徒との談論を基礎として行われる。メディアシステムはこの談論を媒介し、支援するシステムと考えるべきではないか」¹⁾と述べた。このディスコースの大きな単位を組織するストラテジーの総体²⁾として「方法」という概念を16世紀にラムス Ramus, Petrus (1515-1572) が用いていることに興味をもった。本研究は、このラムスの「方法」という概念の生まれた背景、「方法」の構造とその意義について検討してみたい

2. ラムスの生涯

ラムスの生涯については、バーナード Barnard, H.C. の『教育に於けるフランスの伝統』³⁾ (1922) とオング Ong, W.J. の『ラムス』⁴⁾ (1958) に詳しい。ここでは、バーナードの書物を主として用いながら、ラムスの生涯について記述してみたい。ラムスは、1515年、フランスのピカルディのカット Cuth 村に生まれた。高貴の出であったが、家は極端に貧乏であった。祖父は炭焼きを職業としていた。ラムスは幼時から学問好きであった。学問をするためには、パリ大学の評議員の召し使いになるしかなかった。8才の時から何度かその試みを行った後、12才の時、ナバレ Navarre カレッジの評議員グロッセ De le Grosse の召し使いとなった。召し使いとしてはたらしきながら、教養部のカリキュラムを学習した。当時のカリキュラムは、アリストテレスの学問に支配されていた。哲学のコースを終えて1536年にラムスは21才の時に論文を提出した。論文の題目は「アリストテレスによって言われたことは、全てうそである」であった。この論文に関わる討論を終えて、彼は、修士号を得るコースに進んだ。修士号を得ると彼は、コレージュ・ド・マルスで、最初に教え、次に、コレージュ・ド・ア

ヴェマリアもしくは、コレージュ・ド・フーバンで教えた。ここで、彼は、終生の友タロン Omer Talon に助けられた。

1543年、彼は、アリストテレスを批判した *Di-alecticae Partitiones* と *Aristotelicae Animadversiones* を出版した。これらの書物は、大学に咎められた。彼を裁く委員会が設置された。彼の書物は、コレージュ・ド・キャンブレの前で焼かれた。彼の罪状を書いた文書は、ヨーロッパの全大学に送付された。

彼は、哲学を講義することを禁じられたが、学友であり、当時、枢機卿であったシャルル Charles of Lorraine の保護によって、コレージュ・ド・アヴェマリアで、修辞学と数学を教えることを許された。

1546年にパリでベストが発生し、パリ大学のほとんどの構成員が安全を求めて逃げ出した。その恐慌が去るとラムスは請われて、コレージュ・ド・プレスルの校長となった。そこで、彼は、修辞学を教え、親友タロンは、彼を助けて哲学の講義をおこなった。1547年、アンリ2世が王位に就いた。その家庭教師は、親友シャルルであった。ラムスの哲学の講義停止は解除された。彼は、先の書物を再刊し、新たに、キケロとクインティリアヌスを厳しく批判した2冊の本を出版した。再び、激しい嵐がまきおこった。大学の一般的態度は明白にラムスに敵対的であった。

しかし、パリ大学の外では、違っていた。1551年、王立大学コレージュ・ド・フランスは、彼を招聘した。彼の就任講義には、2千人以上の聴衆が参加した。

1554年には、*Institutiones Logicae* の新版を発行した。

1557年には、数学に関する講義を始めた。

この年、アンリ2世が亡くなった。彼の凋落が始まった。

1562年、大学改革に関する書物 *Proemium re-formandae Parisiensis Academiae ad Regem* を出版した。

1561年、カトリック教会とユグノー派の和解のための集会が失敗に終わった時、ラムスは、プロテスタントのユグノー派についた。これは、枢機卿シャルルの怒りをかった。シャルルは、ラムスの支援を止めた。ラムスを慕うプロテスタント派の学生達が、大学の教会に乱入し、聖人の像をなげるという事件が勃発した。1562年7月9日、大学の全教官は信仰告白をするように命令された。ラムスは大学に居りづらくなり、フォンテンブローに引退した。

30年間フランスを覆うことになる宗教戦争が勃発した。

1563年、わずかな平和が訪れた。ラムスは、ボロニア大学の職を断り、コレージュ・ド・プレスルに帰って、講義を再開した。

1567年、事態は、再び悪化した。ラムスは、いったん避難するが、1568年に、コレージュ・ド・プレスルに帰り、その後、ドイツ、スイスのプロテスタント地区を訪問し、大歓迎を受ける。大学に帰った時、もはや、そこには、コレージュ・ド・プレスルの校長の椅子も、コレージュ・ド・フランスの教授の椅子もなかった。ジュネーブ大学の哲学の教授の椅子を求めたが、失敗に終わった。コレージュ・ド・プレスルに帰ることは許されたが、教えることは禁じられた。彼は、著作活動に専念した。

1572年、聖バーソロミューの大虐殺の日、コレージュ・ド・プレスルの中で暗殺された⁵⁾。

3. ラムスの著作

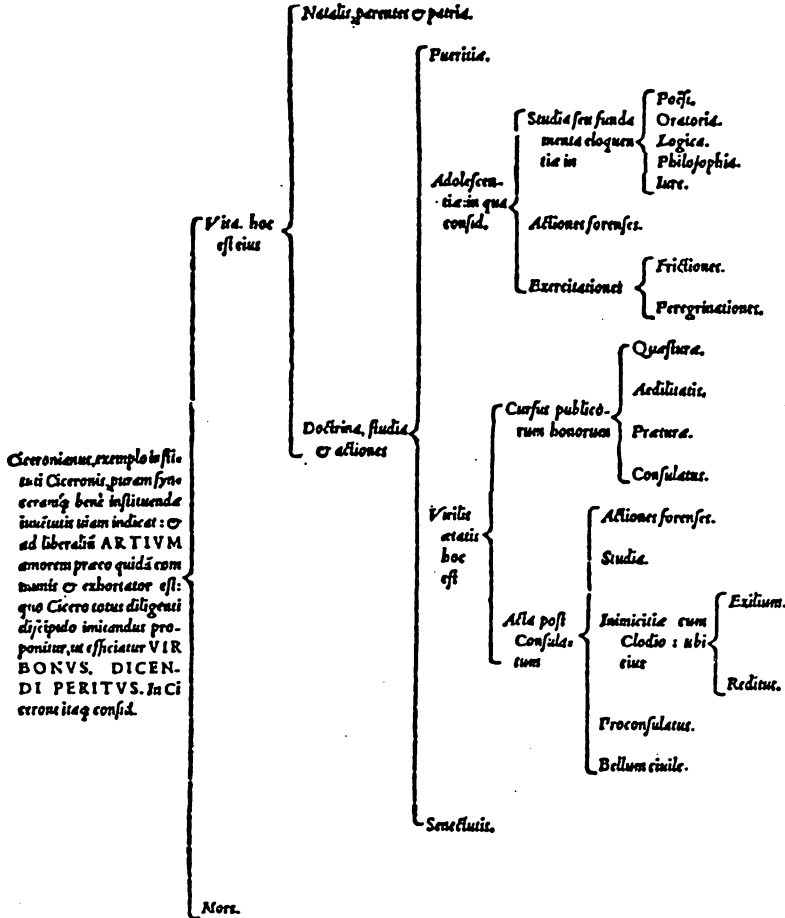
オングの『ラムスとタロンの目録』(1958)によれば、ラムスの著作は次の60ある。

- 1543 弁証法の訓練
- 1543 弁証法講義
- 1544 数学の研究に関する講演
- 1545 ユークリッド幾何学
- 1546? プレスル カレッジにおける講演
- 1545 タロンによる雄弁術の訓練
- 1546 キケロのスキピオの夢の説明
- 1547 哲学の雄弁術の結合に関する講演
- 1547 ブルータスの諸問題
- 1548 タロンの修辞学
- 1549 クインティリアヌスの修辞学の評価
- 1549 ラテン語に翻訳されたプラトンの手紙の説明
- 1550 運命に関するキケロの論文
- 1550 プブリウス レントゥルスにあてたキケ

- ロの第9の手紙の解説
- 1551 バリ大学の哲学のための弁明
- 1551 欽定講座教授就任演説
- 1551 ラビリウスに対するキケロの弁明の解説
- 1552 農場法に関するキケロの演説の解説
- 1554 キケロの法律に関する最初の本の解説
- 1555 算術
- 1555 ヴァーギルの田園詩
- 1556 Turnebe へのタロンの警告
- 1555 弁証法 (フランス語)
- 1556 ヴァーギルの農耕詩解説
- 1557 最良の雄弁家に関するキケロの序文解説
- 1557 キケロ研究家
- 1557 代表に関する講演
- 1557 全ての教科のための唯一の方法
- 1559 古代ガリア人の慣習
- 1559 シーザーの軍事科学
- 1559 文法もしくはラテン語文法
- 1559 文法初歩もしくはラテン語文法初歩
- 1559 正しい発音を含んだ文法講義
- 1560 代数
- 1560 ギリシャ語文法
- 1560 ギリシャ語統語論
- 1560 ギリシャ語文法初歩
- 1562 フランス語文法
- 1562 バリ大学改革覚え書き
- 1563 自由教科欽定講座教授に関する講演
- 1565 物理学講義
- 1566 形而上学講義
- 1566 数学欽定講座に関する二つの弁明
- 1566 数学入門のための序文
- 1566 数学入門
- 1567・68 枢密院への抗議
- 1568 バリ大学への別離の手紙
- 1569 第2代表に関する講演 (講演は1561)
- 1569 算術講義
- 1569 幾何講義
- 1569 幾何
- 1569 Jakob Schegk との文通
- 1571 Jakob Schegk に反対してアリストテレスの擁護
- 1571 バーゼル
- 1576 遺言
- 1576 キリスト教に対する注釈
- 1582? Marcus Claudius Marcellus のためのキケロの演説の解説
- 1601 ラテン語に翻訳されたアリストテレスの政治学

P E T R I R A M I

C I C E R O N I A N V S .



DISCE PVER VIRTUTEM EX ME,
VERVM'QVE LABOREM.

In Cicerone imitando, non Latinitatem solam, sed ornatum, prudentiam, cognitionem rerum, vitæ in primis, morumq; virtutem: neq; solum Ciceronis epistolas, orationes, scholas & disputationes: sed multo magis pædagogos, processus artium, labores ediscendi & uigilias meditationum, quibus orator tantus instructus est, Ciceronis imitator intueri, & eloquentiæ Ciceronianæ principia potius, quàm extrema contemplari: Ciceronemq; ipsum non nexo aliquo aut crepundijs, sed toto corpore, uel potius animo uitaq; tota complecti: gradus ætatis, magistrorum prudentiam, disciplinarum generum, commentationum labores: continentia, fortitudinis, sapientia, iustitia, omnesq; vitæ uniuersæ tanquam fabulæ actus considerare debet: ut appareat, quomodo efficiatur Vir ille bene dicendi peritus. Orator, siue in fore ciuiliu causarum actor, quales s. u. l. recõsulti: siue religionis interpret & populi Doctor, quales sunt Theologi: Huc enim modò generaliter & communiter inquirimus, non unius artis hominem.

LABOR OMNIA VINCIT,

1 Ciceronis

図1 二分法によって示されたキケロの伝記

様々な手紙⁶⁾

これらの著作の中で、1555年に出版された『弁証法』は、260版を重ねた⁷⁾。

ラムスは、専門用語としてのフランス語を用いた最初の人物の一人であった⁸⁾。

オングはこれらの著作を次の4つの時期に分かって説明している⁹⁾。

第1の時期は、その性質において修辞学的なものである。彼は、自分はプラトン主義といいながら、プラトンに関する著作は一つに過ぎず、キケロの注釈がほとんどである。

第2の時期は、弁証法的方法的時期である。これは、1555年と1556年の『弁証法』から始まる。全ての教科が、一般から個別へ進むという原則に従って、教育学的に提示されるべきであるという「方法」という概念は、1546年の『弁証法の訓練』の中に初めて現れるが、1555年の『弁証法』において、ラムスは、弁証法から始めてあらゆるものを「方法化」し始めるのである。

この方法化の試みは、図1¹⁰⁾のような、キケロの人生の二分法による図解に良く表現されている。

この「方法」の時期は、1565年の「物理学講義」をもって終わる。

第3の時期は、数学に集中した時期である。彼は、数学に対して大きな成果を残さなかったが、「方法」の弟子として、量的世界が精神的安堵の世界であったとオングは述べている。

第4の時期は、没後出版された『キリスト教に関する注釈』で代表される。この書物の中で、彼は、宗教を「良く生きる学問」(ars bene vivendi)として、宗教を一つの学問(ars)に還元している。

4. ラムスの「方法」の背景

ラムスの「方法」に関する説明は、彼の主著『弁証法』(1555)に記述されている。ここでは、オングとギルバートの研究に主として基づいてその背景について説明してみたい。

ラムスの方法概念の研究に就いては、オングの『ラムス』(1958)を中心とする研究とギルバートの『ルネッサンスの方法概念』¹¹⁾(1960)がある。ハウエルの『英国の論理学と修辞学、1500—1700』¹²⁾も英国のラミストの章で、ラムスの弁証法と修辞学の改革を取扱っている。最近の研究では、アシュワース Ashworth, E.J. の『中世後の

時代に於ける言語と論理学』¹³⁾(1974)とジャルダン Jardine, Lisa のもの¹⁴⁾がある。

オングの研究は、ラムスの「方法」を中心にすえたもっとも本格的なものである。オングは、ラミズムの背景を遠い背景としてのスコラ哲学と思考の量化、直接の背景としてアグリコラの場所の哲学、共通の背景としてスコラ哲学に於ける教養諸科の状況、そして、教育学的不可抗力、から説明している¹⁵⁾。

ギルバートの研究は、ルネッサンスの方法論の古代的中世の源泉から説き起こして、ルネッサンスの方法論に及び、ラムスの方法に就いて説明している。

ここでは、オングとギルバートの研究を要約してみよう。

オングによれば¹⁶⁾、中世論理学は、アリストテレス論理学から始まって、次第に、量的に表現する傾向が強まった。その代表的なものは、ピーター・オブ・スペインの *Summulae logicales* であった。この書物は、現代の数学的論理学がそうであるように、量に始まって量に終わっている。

活版印刷の発明とともに、話すことを図解する考えが生まれた。ルフェーブル Jacques Lefevre d'Etaples (1455—1537) は、このような量的な論理学を表で表現することを試みている(図2)¹⁷⁾。

さらに、図3¹⁸⁾、図4¹⁹⁾、図5²⁰⁾、図6²¹⁾、のように論理学を図解する試みも現れた。このような図解による論理学は、活版印刷が使用され始めた、論理学の1530年までの傾向であった。

オングによれば、ラムスの弁証法の直接的背景は、アグリコラ Agricola Rudolph (1444—1485)の場所の弁証法である。

アグリコラのもっともよく知られた著作は *Dialectical Invention* である。この書物は、3巻からなっている。第1巻は、弁証法の場所を取扱っている。第2巻は、弁証法の性質と効用、弁証法の題材としての「質問」を取扱っている。題材とは、われわれがそれについて話しているものごとのことである。この題材についての作業の道具はスピーチである。第3巻は、「効果」を作り出すことを取扱っている。

アグリコラの弁証法は、それまでの弁証法もしくは、論理学と比べて、「人間的」であった。厳密な論理構造よりも聞き手の扱い方により関心があった。大学の教師中心の教授法に反対し、人文主義者の生徒中心の教授法に適した弁証法を要求

৯

[illegible]

		Enclitice expostibiles.	Expostice.
	1.	Expositiua.	Et ante ene alai cl homo. [a] c
	1.	Expositiua.	Et m omne alai cl homo. [o] i
	2.	Expositiua.	Et m omne animal nō cl homo. [a] c
	2.1.	Expositiua.	Et m omne alai nō cl homo. [i] o
	2.	Expositiua.	Et m animal cl homo. [i] c
	3.	Expositiua.	Et m tantum alai cl homo. [c] i
	3.	Expositiua.	Et m animal nō cl homo. [o] a
	3.1.	Expositiua.	Et m nō alai nō cl homo. [a] o
		Expositice expostibiles.	Expostice.
			[i] i [i] j
	1.	Expositiua.	Et ante alai pter hōy ē irrōnale. [a] c [i] a
	1.	Expositiua.	Et ante alai pter hōy ē irrōnale. [o] i [o] i
	2.	Expositiua.	Et ante alai nō pter hōmīnē ē irrōnale. [o] i [c] a
	3.	Expositiua.	Et ante alai pter hōmīnē nō ē irrōnale. [a] c [i] a
	3.1.	Expositiua.	Et ante alai nō pter hōy ē irrōnale. [a] c [i] a
	3.2.	Expositiua.	Et ante alai nō pter hōmīnē nō ē irrōnale. [o] i [o] i
	3.3.	Expositiua.	Et ante alai nō pter hōmīnē nō ē irrōnale. [o] i [c] a
	3.4.	Expositiua.	Et ante alai nō pter hōy ē irrōnale. [a] c [i] a
93		In illis quibus formalis docetur expositio expositiuaque que fami- car fecerunt regulam binariū cum in eis duobus locis possit nega- re o poni tunc in principio locum in medio ante copulam. Excep- tatio per nomen nō fami car fecerunt regulam et tunc si quia tri- locus nō autō poni potest. Expositio fecit nō nunciatio signum exceptiua: et tunc po signū exceptiua. Locales autem omnes disposiō qualescunq et quantitas significant et exponuntur	
		Expositice et copulatiue.	Expostice.
			[i] i [i] j [i] k
	1.	Expositiua.	Et hōs hōs qd ē rōnale ē rōnabī. [a] i [a] i [i] k
	1.	Expositiua.	Et hōs hōs qd rōnale ē rōnabī. [o] i [o] i [i] k
	2.	Expositiua.	Et hōs hōs qd rōnale ē rōnabī. [i] c [i] c [i] k
	3.	Expositiua.	Et hōs hōs qd rōnale nō ē rōnabī. [a] i [c] i [i] k
	3.1.	Expositiua.	Et hōs hōs qd rōnale nō ē rōnabī. [i] a [i] a [i] k
	3.2.	Expositiua.	Et hōs hōs qd rōnale nō ē rōnabī. [o] i [i] a [i] k
	3.3.	Expositiua.	Et hōs hōs qd rōnale nō ē rōnabī. [c] a [i] a [i] k
	3.4.	Expositiua.	Et hōs hōs qd rōnale nō ē rōnabī. [o] i [c] o [i] k

■

Exponibiles copartitive.		Exponere.
		111. 1. 1.
1.	Copularius. Oia homo est fortis aino.	111. 1. 1.
1.	Disiunctius. nō oia homo est fortis aino.	111. 1. 1.
1.	Disiunctius. oia homo nō est fortis aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Copularius. nō oia hō nō est fortis aino.	111. 1. 1.
1.	Copularius. Oia homo differt ab aino.	111. 1. 1.
1.	Disiunctius. non oia homo differt ab aino.	111. 1. 1.
1.	Disiunctius. oia homo nō differt ab aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Copularius. nō oia hō non differt ab aino.	111. 1. 1.
In apportionibus. Copularius quattuor diu hypotetica negat et vniuſerſal affirmatiua negat alterius quattuor et oī ſigma eue pare est vniuſerſal affirmatiua moral vocat. Et eue parauitior vocat. Cum vero prima eue pare est particularis affirmatiua: notatur vocat. Iſt. et eue copartatiua vocat.		
Incipit in prima acceptione.		
	Copularius. Oia homo incipit eſſe aino.	111. 1. 1.
1.	Disiunctius. nō omnis homo incipit eſſe aino.	111. 1. 1.
1.	Disiunctius. oia homo nō incipit eſſe aino.	111. 1. 1.
1.	Copularius. oia homo incipit nō eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Copularius. nō oia homo nō incipit eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Disiunctius. nō oia homo incipit nō eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Disiunctius. oia homo nō incipit nō eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Copularius. nō oia homo nō incipit nō eſſe aino.	111. 1. 1.
Incipit in prima acceptione.		
	Copularius. Oia homo definit eſſe aino.	111. 1. 1.
1.	Disiunctius. nō oia homo definit eſſe aino.	111. 1. 1.
1.	Disiunctius. oia homo nō definit eſſe aino.	111. 1. 1.
1.	Copularius. oia homo definit nō eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Copularius. nō oia homo nō definit eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Disiunctius. nō oia homo definit nō eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Disiunctius. oia homo nō definit nō eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Copularius. nō oia homo nō definit nō eſſe aino.	111. 1. 1.
Incipit in ſecunda acceptione exponit per exponens cauſe diſtincti et quattuorſies incipit definit in prima: copartiuo. apportionibus ſibi reſpondentes in ſua negatiua auolunt. Et ſtra definit in ſecunda acceptione exponitur per exponens cauſe quattuorſies et quattuorſies incipit in prima: copartiuo. apportionibus ſimiles in ſerie negatiua auolunt.		
Incipit in ſecunda acceptione.		
	Copularius. Oia homo incipit eſſe aino.	111. 1. 1.
1.	Copularius. nō oia homo incipit eſſe aino.	111. 1. 1.
1.	Copularius. oia homo nō incipit eſſe aino.	111. 1. 1.
1.	Disiunctius. oia homo incipit nō eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Disiunctius. nō oia homo nō incipit eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Copularius. nō oia homo incipit nō eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Copularius. oia homo nō incipit nō eſſe aino.	111. 1. 1.
1. 1. 1.	Disiunctius. nō oia hō nō incipit nō eſſe aino.	111. 1. 1.

図2 算術論理学

した。弁証法とはディスコースする技術それ自体のことであった。

弁証法は、アグリコラによれば、二つの部分、すなわち、意思の選択 (invention) と判断 (judgment) に分かれる。この区分は、キケロの Topics の区分の論理学よりは、修辞学の伝統に属する。アグリコラは、しかし、「意思の選択は、修辞学の中には、適切な場所がない」と述べて、意思の選択を弁証法に属するものとし、弁証法と修辞学を分離してしまった。

アグリコラにおいては、蓋然性の弁証法と学問的論証の区別は、便宜的に取り除かれたが、他者を説得するディスコースすらアグリコラにとっては、教授過程であった。教授とは、知られていないことをより知られるようにすることであり、全てのディスコースの合計であり、実質であった。

1530年に、アグリコラの著作の注釈者ラトモス Latomos, Bartholomew は、既に、二分法の表を示している(図7)²²⁾。

オングによれば、ラムスの弁証法の直接的起源
 はこのアグリコラの弁証法である。

オングは、ラミズムの生まれる背景として当時の教養部の事情を次のように説明している。

教養部は、学生に修士号を与えて、教師の組合の一員として迎え入れるところであった。カリキュラムはラムスの時代、実に、7才から始めて、およそ15才ぐらいまでの学生を対象としていた。

教師のギルドの一員を養成するという意味において大学は原則として師範学校であった。この大学において、弁証法または、論理学は、教え方を教える教科であった。討論は、師範学校の演習であった。人文主義者とともに書く演習が入ってきた。この書く演習とともに大学の師範学校の性格の終わりが始まった。消えていく談論よりは、知識が書かれたものの中に保存されるより安定した世界が好まれ始めたのである。

ラムスの時代、弁証法と教授法の混合は、一層濃厚となった。「弁証法の技術は、ディスコースの方法を教えることである」「論理学は、ディスコースを良く行うことを教えることである」といわれた。「ケンブリッジとニューイングランドにおいて、教授学は弁証法とほとんど区別できな

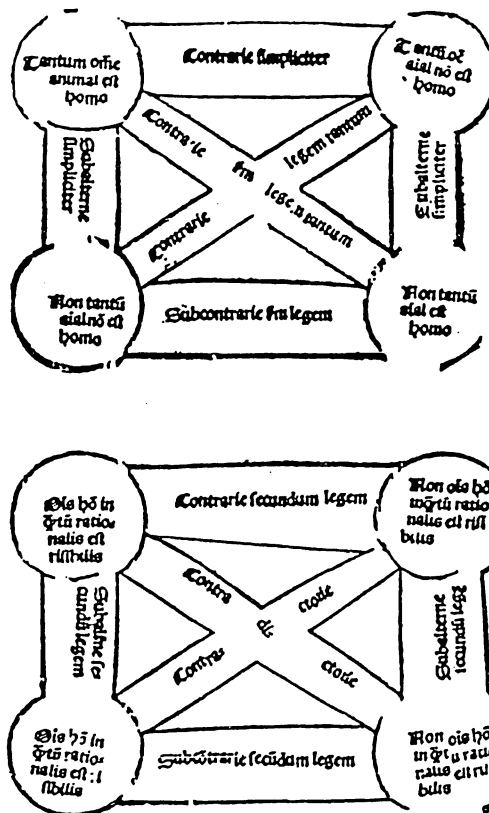


図4 幾何論理学

Noticia tractatum
Tractatus cuiuscumq;
 noticiam & ordinem: facili quadam via
 prehendes: nec potest id esse latebrosius:
 si subscripta signa: tractatus singulis ac
 comodatus: in te teneris: Numerus equi
 dem signorum: in capitulis positis: quorū præbet tra
 ctatum: sed & quod numerum sequitur: materia illius
 tractatus: de qua hic indicat

Signa tractatum
 1 enuntiatio 2 predicabile
 3 predicamentū 4 syllogismus
 5 locus dialecticus 6 fallacia

Signa tractatum
 7 Suppositio 8 Ampliatio
 9 Restrictio 10 Appellatio
 11 Distributio 12 Expositio
 13 Exclusio 14 Exceptio
 15 Reduplicatio 16 Descensus

図5 小さな少年のための論理学

TABULA DIVISIONIS LOCORUM

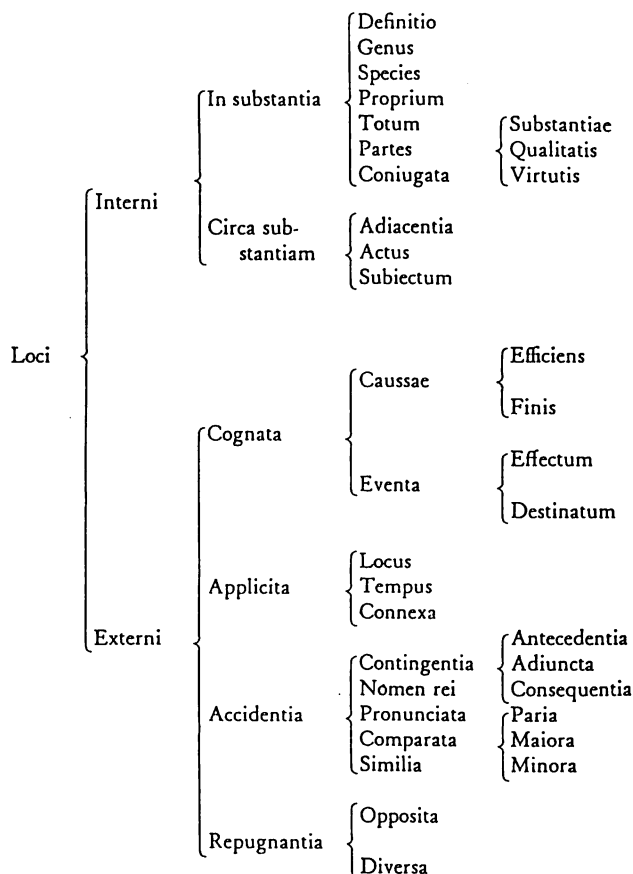


図7 ラトモスによって示された二分法

かった。なぜならそれは哲学の学習の教授のことであったから」といわれている。

教授学は一種の大学の真髄であった。

以上が、オングのラミズムの現れる背景にたいする説明の要約である。

ギルバートは、古代のプラトンの方法概念から説き起こし、方法概念の系譜の中でルネッサンスの方法概念を説明している。ギルバートの説明を要約すれば次のようなものである²³⁾。

プラトンの *Phaedrus* によれば、ソクラテスは、癒す技術 *healing art* と弁論の技術 *rhetorical art* を区別した。医師が身体の性質を知る必要があるように、弁論家は、魂の性質を知る必要がある。それは、ヒポクラテスが推奨する「方法」無しで

は知ることができない。すなわち、方法をもった人間のみが、確かな技術 (*art*) を持つとされたのである。

アリストテレスの方法論は *Topics* で伺われる。それは、プラトンの場合と同じように、真なるものの論理的に正しいものをめざしている。中世の討論はこの *Topics* に大きな影響を受けている。

ストア哲学に於ける方法概念の特徴は、ゼノンの、技術は「人生におけるある有用なもののための一組みの認識である」という定義によって示される。

医学者であり、アリストテレスの注釈者でもあったガレン *Galen* は、論理的推理だけでなく、経験も必要であると述べている。

ギルバートは、このように、プラトン、アリストテレス、ゼノン、ガレンの方法概念をたどり、

さらに、ギリシャの注釈者、中世に於けるアリストテレスの注釈者の方法概念の後をたどっている。さらに、哲学用語としての方法の概念をプラトン、アリストテレスから、再度たどっている。そして、ルネッサンスの方法概念の展開の諸相を追っている。16世紀の学生にとって方法とは、主題(subject)を討論する方法であった、と述べている。

5. ラムスの「方法」の構造

ラムスの論理学または弁証法は、意思の選択、論議の見つけ方、invention と判断 judgement からなっている。この判断は、dispositio (arrangement, 配列, 論議の配列のしかた) を含んでいる。この配列は、伝統的には、修辞学の第2の部分である。弁証法のこのようなとらえ方において、彼はアグリコラを継承している。弁証法とはラムスにおいては、論争の技術であり、全てのディスコースを支配する。

方法とは、論議の配列の方法をさす。すなわち、方法とは、多くの良い議論の配列のことである。ラムスによれば、この配列は、一般から個別に進というやり方で、ディスコースを組織すべきである。聞き手が極端に強情な場合に、個別から一般へ進む「秘密の方法」を用いる。この「方法」は、論理学の第2の部分であるが、確かに、論理学の方法というよりは、授業の方法である。ラムスの二分法による図解は、この一般から個別への配列を図解したものであった²⁴⁾。

ラムスの実践の実際を検討してみよう。

プレスル・カレッジのカリキュラムは次のようなものであった。

文法 (ラテン語, ギリシャ語)	3 年間
修辞学	1 年間
弁証法または論理学	1 年間
数学 (算術, 幾何, 音楽, 光学, しかし, 実際はこれより少ない)	1 年間
物理学	1 年間
合計	7 年間

15才で修士号を得るのが通常であった。

教室の手続は、説明と演習からなり、この二つに充てられる時間は全ての教科で同じであった。

1日の時間割りは次のようなものであった。

午前中1時間、午後1時間、教師の説明を聞き、その日の残りの時間は、説明されたことについて瞑想、学習、演習を行うこととされた。具体的には、2時間の会話、討論、模倣、演習であった。会話、討論とあるが、ラムスは、書く作業を討論より優先し、会話を従属させた²⁵⁾。

オングによれば、ラムスの方法とは、次のように要約される。

第1に、それは、ディスコースを組織する方法であって、事物と取り組む方法ではない。

第2に、ディスコースの組織においても、実験を取扱うのに大切な叙述ないし記述の目的には役立たない。

結局、ラムスの方法は、ディスコースの箇条書き的アプローチ (itematizing approach) と呼び得るものであった、とオングは説明している²⁶⁾。

ハウエル Howell, W.S. は、ラムスの方法を次のように説明している。

方法とは、配列である。

方法とは、自然で冷静なものである。

自然な方法とは、科学的ディスコースを配列する方法である。

自然な方法とは、二分法の方法である。

自然な方法は全てのディスコースに適用できる²⁷⁾。

ハウエルは、アリストテレスやキケロが、弁証法を学問的コミュニケーションの理論であり、修辞学は大衆的コミュニケーションの理論であるとしたのに対し、ラムスは弁証法を主題 (subject matter) とコミュニケーション形態の理論、修辞学を様式的な口頭提示の理論として提示したのであると述べている²⁸⁾。

6. ラムスの「方法」の意義

ラムスの弁証法あるいは論理学は、論理学の書物としては高い評価を受けなかった。アシュワースは、ラムスの『弁証法』には、優れているもの、新しいものは何もないと述べている²⁹⁾。それでは、ラムスの本がこれほど読まれた理由はなんであろうか。アシュワースによれば、それは、学生の目から見て、このような本で勉強した方が良かったからである。ラムスは、教条主義者としてとりばやく知的卓越性を得ようとするものに魅力があっ

たのである、とアシュワースは述べている³⁰⁾。

ونغは、ラミズムは、論理学を学んだことがその地位の象徴となる、英国と大陸に於けるカルヴィン主義のブルジョアジー、教師、大学の卒業生に人気があった、と述べている³¹⁾。

また、ギルバートも、ラミズムは、短時間に学習を訓練する方法を学生に教えることに於いて、プロテスタント倫理に合致するものとして人気があったのであると推測している³²⁾。

イギリスのケンブリッジ大学の16世紀に於ける弁証法の教授を研究したジャルダンの見解は少し異なっている。彼女は、ケンブリッジ大学で、ラミストの本が成功した理由を3つあげている。

第1の理由は、それまで用いられていたセトン John Seton の手引ききよりより単純であったことである。

第2の理由は、カリキュラムへの野心的なリベラルなアプローチであったことである。当時の教養部の焦点は、ディスコースの技術に移っていた。それは、全ての専門分野の不可欠の基礎であった。

第3の理由は、教養部の初歩の学生の要求に合致していたことである³³⁾。

ジャルダンによれば、弁証法は、古典文学を読むプログラムの技術的中心であった。教養ある人間のしるしであったのである³⁴⁾。

ジャルダンは、このような解釈から見ると、ونغの解釈は奇異に見えると述べている³⁵⁾。

ラムスのテキストが迎えられた理由については、このように解釈に違いがある。しかし、ジャルダンもアグリコラの弁証法の改革は、本質的に教授法の改革であると述べている³⁶⁾。ラムスの弁証法が教授法やカリキュラムの改革に関連したものであることについては、ونغもジャルダンも一致している。

今日の視点から見て、ラムスの「方法」は、教室に於けるディスコースの組織化の方法を示したという意味に於いて、また、そのディスコースによって知られていないことからより知られている状態に移行させようとした点において、それは、論理学の視点から授業方法にアプローチした一種の教授学であった。

今日の教授学の中では、授業方法の論理的側面は、たとえば、クリンクベルクの『一般教授学入門』では、教授方法の内的側面のうちの論理的方法 (logische Verfahren) として位置づけられている³⁷⁾。

今日の教育方法学研究の視点から見て気付かれることを若干述べてみよう。

- (1) 活版印刷の発明とともに、論理学の書物に図や表や絵が用いられていることである。絵入り教科書は、コメニウスの『世界絵図』(1658) が最初であるとい一般的に考えられている。しかし、論理学のテキストでそれ以前に絵や図が用いられていたのである。確かに、絵や図を授業で用いることは、それまでの口頭に頼った教授法が、視覚を併用した教授法に変わっていくであろうことは、想像に堅くない。活版印刷の発明は、知識の蓄積を容易にし、その普及を促進し、人間の学習をより読むことに依存するものにしたであろう。確かに、ونغが言うように、ラムスは、この活版印刷が普及し始めた時代の人物であった。
- (2) 教授法の改革が弁証法あるいは、それと同義に使われる論理学の中で行われたことは、面白いと思う。学問的コミュニケーションの理論としての弁証法と、大衆のコミュニケーションの理論としての修辞学の区別は、確かに、アグリコラやラムスにおいてあいまいなものになったとしても、教室に於けるディスコースを知られていないことを良く知られるようにする過程ととらえることによって、弁証法を教室に於けるディスコースの技術にしまった。逆に言えば、教授方法がディスコースに基礎をおくものであるならば、教授方法の起源は、このようにとらえられたところの弁証法であることになる。

それでは、ラムスの方法は、ディスコースを組織する方法であるが、事物を取扱う方法ではない、また、実験を取扱う記述には向かないというونغの結論は正しいか。確かに、二分法で全てのディスコースを組織することは、限界がある。また、ラムスが、その教室の実践において実験を行わなかったであろうことは想像される。しかし、このことは、ディスコースを組織するという授業形態が、事物を取扱ったり、実験を行うことに向かないことを意味しない、と筆者は思う。なぜなら、絵や図は、現実の事物を反映し、表現したものであると考えれば、ディスコースにおいて絵や図を用いること自体が、ディスコースにおいて事物を取扱うことが可能であることを既に示しているからである。

- (3) 弁証法が、知られていないことを良く知ら

れるようにするディスコースを組織する学問であるならば、弁証法そのものが教室のディスコースを対象とした一種の教授学であることになる。それでは、ラムスが、弁証法を二つの部分に分かったうちの「判断」の中の「論議の配列」を「方法」としたことは、どのように考えたら良いのであろうか。

筆者は、現代のドイツ教授学において、し

ばしば、内容論と区別されて、手続き、形態の問題³⁸⁾として、教授方法が議論される淵源は実にここにあるのではないかと思う。

しかし、教室に於けるディスコースは、題材の選択 (*inventio* 意思の選択) が大切であることを、アグリコラ、ラムスの弁証法は、教えている。

註並びに引用文献

- 1) 中野和光「システムとディスコース——教育工学研究覚え書き——」福岡教育大学教育実践研究指導センター『教育実践研究』創刊号 1993 pp. 83-85. 中野和光「教育工学」『現代教育科学』1991年8月号 pp. 62-63.
- 2) Jardine, Lisa, *Humanism and the Teaching of Logic*, in Kretzman N. et al eds., *The Cambridge History of Later Medieval Philology*, Cambridge University Press, 1982, p. 804.
- 3) Barnard, H.C. *The French Tradition in Education*, Cambridge University Press, 1970 (1922).
- 4) Ong, W.J., *Ramus*, Harvard University Press, 1958.
- 5) 以下 Barnard, H.C. op.cited, pp. 17-38 にもとづく。
- 6) Ong, W.J., *Ramus and Talon Inventory*, Harvard University Press, 1958, pp. 37-40.
- 7) Ong, W.J., *Rhetoric, Romance, and Technology*, Cornell University Press, 1971, p. 85.
- 8) Barnard, H.C. op.cited, pp. 34-35.
- 9) Ong, W.J., *Ramus*, op.cited, pp. 30-32.
- 10) Ibid, p. 31.
- 11) Gilbert, N.W., *Renaissance Concept of Method*, Columbia University Press, 1960.
- 12) Howell, W.J., *Logic and Rhetoric in England, 1500-1700*, Russell and Russell, 1956. Howell, W.J., *Ramus and the French Rhetoric, 1574-1681*, *The Quarterly Journal of Speech*, 37, 1951, pp. 299-310.
- 13) Ashworth, E.J., *Language and Logic in the Post-Medieval Period*, D. Reidel, 1974.
- 14) Jardine, L., *The Place of Dialectic Teaching in Sixteenth-Century Cambridge*, *Studies in the Renaissance*, vol. 22, pp. 31-62.
- 15) オングによるラムスの研究には、これまであげたものの他に次のものがある。
Ong, W.J., *Ramus and the Transit to the Modern Mind*, *The Modern Schoolman*, 32, May 1955, pp. 301-311.
Ong, W.J., *Fouquelin's French Rhetoric and the Ramist Vernacular Tradition*, *Studies in Philology*, LI, 1954, pp. 127-42.
Ong, W.J., *Peter Ramus and the Naming of Methodism*, *Journal of the History of Ideas*, 15, 1953, pp. 235-248.
ラミズムについてふれたものにはその他に次のものがある。
Duhamel, P.A., *The Logic and Rhetoric of Peter Ramus*, *Modern Philology*, XLVI, 1949, pp. 163-71.
French J.M., *Milton, Ramus, and Edward Phillips*, *Modern Philology*, XLVII, 1949, pp. 82-87.
- 16) Ong, W.J., *Ramus*, op.cited, pp. 53-167. にもとづく。
- 17) Ibid, p. 77.
- 18) Ibid, p. 80.
- 19) Ibid, p. 83.
- 20) Ibid, p. 84.
- 21) Ibid, p. 86.

- 22) Ibid, p. 127.
- 23) Gilbert, op.cited, pp. 3-128. にもとづく。
- 24) Pierre de La Ramee, *Dialectique* (1555), Librairie Droz, 1964. Ramus, Peter, *The Logike* (1574), The Scolar Press, 1960. および Ong, W.J., Ramus (1958), Ong, W.J., *Rhetoric, Romance, and Technology* (1971), Gilbert, N.W., *Renaissance Concepts of Method* (1960) にもとづく。
 ラムスにおいて弁証法と論理学はほぼ同義で使われていた。*The Logike* (1574) に於いては、「もしくは、論理学と呼ばれる弁証法は、良く議論することを教える学問である」と述べている。
- 25) Ong, W.J., *Ramist Classroom Procedure and the Nature of Reality*, in Ong, W.J. (1971), pp. 142-164.
- 26) Ong, W.J., *Ramist Method and Commercial Mind*, in Ong, W.J. (1971), pp. 179-180.
- 27) Howell, W.S., *Logic and Rhetoric in England*, op.cited, pp. 160-163.
- 28) Ibid, p. 165.
- 29) Ashworth, op.cited, p. 16.
- 30) Ibid.
- 31) Ong, W.J., *Rhetoric, Romance, and Technology*, pp. 85-86.
- 32) Gilbert, N.W., op.cited, p. 291.
- 33) Jardine, L., *The Place of Dialectic Teaching in Sixteenth-Century Cambridge*, op.cited, p. 59-60.
- 34) Ibid, p. 62.
- 35) Ibid, p. 58.
- 36) Ibid, p. 53.
- 37) Klingberg, L., *Einführung in die allgemeine Didaktik, Volk und Wissen*, 1974, S. 308.
- 38) たとえば、マイヤー Meyer, Hilbert の『教授方法』(1988) では、教授方法の定義1として、「教授方法とは、その中あるいはそれによって、教師と生徒が、制度的や枠組み条件のなかで、まわりを取り巻く自然的社会的現実を獲得する形態並びに手続き (Verfahren) である」と定義している。Meyer, Hilbert, *Unterrichtsmethode I: Theorieband*, Scriptor, 2 Auflage, 1988 (1987), S. 45.

本研究は、科学研究費（総合研究A）「教育方法学研究における知の枠組み（パラダイム）に関する学際的・総合的研究—戦後授業観の総括と21世紀教育への展望—」（研究代表者 吉本 均）の一環として行ったものである。